

天台法華宗より遮那業

仲 尾 俊 博

第一章 はじめに

第一節 中国天台重視の反省

——天台法華宗によせて——

伝教大師最澄は天台山に趣き、中国天台の正系の相承を受け継いで、平安新宗として天台法華宗を樹立したという点において、高い評価が与えられている。一方日本の現実課題に答えようとして己証的な独創性豊かな遮那業を形成しようとしたことに対しては正当な評価が与えられていない傾向がみられる。つまり中国天台大成者の智顗の「伝灯」の重要性が強調されて、その正統な中国天台を受法して天台法華宗を樹立したということに対しては当時の南都仏教界も容易に認めた。ところが「己証」を発揮した日本の最澄の遮那業の成立には色々な反論がだされている。

もともと天台史の流れの中では「伝灯」と「己証」は一對のもので共に高い価値が与えられるべきまものであるのに、中

国天台の「伝灯」と最澄の「己証」との間にアンバランスの評価がみられていることは中国仏教尊重の風潮が強かったからであると考えられる。「伝灯」を受けついだ天台法華宗のことも、「己証」を発揮した遮那業のことも、共に日本天台としては重要視してよいはずのものが、どうして遮那業に対して軽視の風潮がみられるようになったのであろうか。

初めに天台法華宗求法の経過の中から、その理由の一端を探究してみたい。島地大等先生の『天台教学史』の中では、「立祖相承論」にウエイトがおかれている。すなわちその項の最後のところに、

今更にその帰着するところを再約すれば、

一 金口相承 は第二今師相承を立つるの前提にして、天台教義の源流は龍樹に発するものなることを明かにし、

二 今師相承 は天台宗立祖の中心点をなし、正統教祖として慧文・慧思・天台の相承を示し、

三 直援相承 に於ては天台の法門中教祖己証特発の教義ある

ことを指示し、

四 訳主相承は支那に於ける天台教の源頭は羅什に在ることを頭はし、

五 九師相承 に於て南岳天台の同代の禪家の綜合的思想を明かにするに各々その特色を有す。³⁾

とあつて、今師相承の慧文（実像はつかめない）慧思、智顗の相承の流れが立祖相承論の中核であることを示している。もちろん「伝灯」としての天台智顗の教義を重要視することは大切なことは論をまたないのであるが、密教を導入して遮那業を成立させた「己証」の最澄教学を傍系的な扱いをしていることは再考されてよい。さらに『天台教学史』では第三篇「趙宋天台史」のあとに趙宋時代より古い「日本古代天台史」がでてきて、ウエイトが中国天台におかれているように思われる。その中国天台中心の学風は日本の天台教学研究の上に長い間強い影響を与えてきた。つまり天台宗の主流は中国天台にあつて、悪く考えると、日本の最澄教学は派生的な圈外的な扱い方をされているともいえる。

この天台法華宗重視に対し遮那業軽視の傾向のあることを二三の資料よりとりだしてみたい。

「仏教を真によく知るための本」（鎌田茂雄）として今でも解説書として使用されている凝然の『八宗綱要』（文永五年（一一六八））の中の「天台宗」の項を取り出してみたい。そ

の天台宗の歴史を書いているところに、

爰に日本の伝教大師、大唐国に渡り、道邃和尚に謁し、広く此の宗を伝え、瀉瓶遺すことなく、伝写尽く、遂に日本に還りて之を叡岳に弘む。³⁾

とあつて道邃―最澄の天台法華の伝承が強調されている。

しかしもう一つの順暁よりの密教受法のこととは不問にふされている。

ところが一乗忠の『叡山大師伝』では、高雄灌頂については力をこめて書いている。

真言の秘教等いまだこの土に伝えず。しかるに最澄闍梨幸いにこの道をえ、良に国師たり。よろしく諸寺の智行兼備の者を抜きて灌頂三昧耶を受けしむべし。³⁾

この記事からすると、最澄の密教受法のこととは桓武帝側近から高い評価が与えられたことを示している。ところが凝然はこの密教受法のことを不問にしている。さらに教義の解説の中でも触れるところがない。すなわち、「五時八教」の説明の中で教観二門をあげているだけで終っている。（この遮那業軽視の伝承は、最澄の直弟子義真の書いた『天台法華宗義集』を凝然は参考文献として利用したからとも考えられる。）凝然の批判は当時の日本仏教の中での天台宗の立場を示すものであつて、そこには中国尊敬の姿勢から道邃教学が高く評価されているともいえる。

さらに最澄教学輕視の風潮は中国四明天台尊重の姿勢からも伺うことができる。趙宋天台の中心人物であった四明知礼は天台智顗の「伝灯」を重んじて天台教学の復興を計って、真言密教には高い評価を与えなかった。加えて最澄が入唐中深く心酔した道邃に対しては、『十不二門指要鈔』（知礼）の中では、六祖湛然の天台義に背く学説がみられる。——道邃は止観の正統思想を理解していないと非難している。この道邃への非難はそのまま弟子の最澄に及ぶことは当然の筋道である。四明天台が江戸時代に日本天台の主流になってくると、それに反比例して最澄教学の評価は下降線をたどり、「己証」の遮那業は勿論のこと、「伝灯」の天台教学についても四明天台優位の評価に変ってきた。そこでは日本天台は中国天台を尊重し、順守することが第一と考えていたからである。その四明天台の日本天台の流伝の経緯については『天台教学』（佐々木憲徳）の中で略説されている。

靈空、玄門などの後に慧澄靈空が出て、さらに大宝寺脱が出づるに及んで、旧来の日本天台の教学は一変して、趙宋四明の学風を以て教相的理論が構成されることになり、現時見るが如く、伝教大師以来の叡山本来の教学と十分に調和し得ざる欠陥を示せるまで、変貌の状態となつてしまつた。

とある。最澄のユニークな学説より、中国天台の相承が大切であるということになる。湛然教学に背く道邃教学を最澄が

伝承したということになると、中国天台重視の姿勢からは日本天台輕視の立場に近世天台は一変してしまつたといえる。「伝灯」を尊重しながら「己証」の学説を發揮した天台宗の大師を選んで高く評価したものに前田慧雲博士の『仏教古今一変』がある。その中で行滿の学説に比較してユニークな学説を發揮した人として道邃の学説を評価している。すなわち、

さて荆溪の次に道邃と云へる人が出たり。是れは日本天台の祖師伝教大師の師匠なり。此の人の時代は、又台宗に一大変化を与えたり、即ち台密一致、台禅一致の説是なりとす。蓋し是より先き、不空、善無畏等の三藏真言密教を伝え、一行阿闍梨之を承けて大日義釈を著し、大日経と法華経とを融合して支那に於ける台密一致の濫觴をなせり。爾來密教は処処に流布して頗る旺盛の兆を呈せり。

ここでは法華の純粹性を固持する保守的な行滿よりも、法華を中心としながら他の密教、禅等を摂取した進取的、総合的な台密一致・台禅一致の学風を宣揚した道邃を高く評価して台宗第二変化をもたせした優秀な人物であるとしてもちあげている。

天台宗の流れの中で道邃教学を取りあげることはそれなりに意味があるといつてもよいが、これと同じように天台宗の「伝灯」に合せて「己証」を發揮した日本の最澄のユニーク

な学説をここでは不問にしているのは何故なのであろうか。

天台宗の流れでは中国天台の動向が第一であって日本天台はその「伝灯」を受けつぐことに汲汲としていると考えてのことであらうか。最澄は総合的な道邃教学をさらに発展進化させて創造的な天台業を成立させようと試みている。この天台法華宗を求め、それがさらに遮那業へと展開した過程の中での最澄の創造性は決して道邃教学におとるものではない。さらに云うと天台の第二変化は、日本の最澄にこそ焦点をあててもよいのではなかったのではなからうか。やはり同じようなユニークな道邃・最澄教学を比較してみても、一方の最澄を軽視しているむきのあることは、天台宗といえど中国天台の「伝灯」こそ第一と考える思考法が日本天台の低流に根づよく残っているからであらうか。加えて江戸時代に趙宋天台の思想が日本に導入され、そこにみられる道邃不信がそのまま最澄教学にも影響して、遮那業形成の努力は高く評価されない傾きがみられたともいえる。以上天台智顗の伝灯相承を受けたものとして天台法華宗がすんなり受け入れられ、智顗が重要視しなかった密教思想を道邃教学を通して受法し遮那業へと発展させた努力のことについては、近年までは正当に評価するのではなくして、かえって傍系的な扱いをしていた傾向さえあったといえる。そして現在においてもまだその考え方は完全に脱皮できているとはいえないようである。

第二節 日本天台における最澄教学の位置

——遮那業によせて——

平安・新宗として「経宗」としての法華経観を成立させるため、入唐求法を試み、その結果、延暦二十五年正月五日の「太政官符」においては、

天台業 二人

一人は大毗盧遮那経を讀ましむべし。

一人は摩訶止観を讀ましむべし。

とあって新たに遮那業の許可が出されている。

俗世の王法を支える仏教として普遍的な天台法華宗が導入されてきたことは、「入唐表」においてすでに表明されていたので南都仏教界でも異を唱えることはなかったのであるが、密教修法としての遮那業に対する理解は冷たかった。そのため中国天台と一線を画するような日本天台が唱導されてきたともいえる。日本天台の名称については佐々木憲徳博士は、

そもそも日本天台とは中国天台に対簡する名称であって、これを使用したのは明治時代の我國の学匠達であつたやうに思ふ。而して日本天台の「日本」なる制限辭は但に天台宗が存在した場であらばしてゐるのみに止まらず、その宗義の結構または法門思想の内容に於て、中国天台と異なるところにあることを示せる意圖も存してゐよう。かかる特異の方面をば、日本的となして、日本

天台という名称をつけたものである³⁾。

といっている。そして日本天台の中国天台に区別される特異な点の一つは正しく遮那業であるといえよう。つまり「法華経」と「大日経」の關係のことである。これが教学としては円密一致の体系化を計るということになるのであるが、天台教判の五時判の中で第五時、法華・涅槃時を第五時、法華・大日時というようにどうして変様させることができるのであるのかという困難な課題であって、このことは当時の中国天台でもまだ明確に解決されていなかった。その上、天台業の解明に最澄は模索していた最中の大同元年（八〇六）十月二十二日、『請求目錄』を弘法大師空海が進上してきた。その目錄の結びのところで顕劣密勝の思想を打ち出して、円密一致の思想を暗に批判している。

定を修するに、多途にして遅あり速あり。一心の利刀を翫ぶは顯教なり。三密の金剛を揮ふは密藏なり。心を顯教に遊ばしむれば、三僧祇、眇かなり、身を密藏に持すれば、十六生、甚だ促かなり。頓が中の頓は、密藏、これに当れり。

とある。この顯密対比の新思想に対抗して、最澄の円密一致の体系化のことに成功させることができるのであろうか。そのため円密一致思想は日本天台のアボリヤとなってきた。この困難な状況の中で、師最澄と共に入唐求法を実現させた義真が天長六本宗書の一つとして著作した「天台法華宗義集」

の中では、密教に触れるところがなかった。すなわち、

陳隋の代、南岳恵思、天台の智顗両師あり。むかし靈山に在りて親しく妙法を聴き、震旦に降誕して、円の一乗を弘む。……巨唐の天宝年中に、湛然法師というひと累聖の重規をもつて、千載膺け、しかして孤り挺れてこの道を中興せるは、実にこの人に頼る。

といつて天台宗の正統の流れは、慧思・智顗・湛然であるとして、順眺より受法の密教は全く不問にふしている。しかし歴史的事実としては、最澄の密教思想は桓武天皇の苦惱をしつかり受けとめ、天皇の精神の安定を計かりたいことを一途に考えたために導入されたといえる。好都合なことは道邃の教学の中に台密一致の思想が包含されていた。その教学に影響されたこともあつて順眺よりの密教受法については積極的にふみきつたのであろう。その辺の事情は義真もよく理解していると思われるのに、どうして密教受法のことを不問にふしたのであろうか。

義真の遮那業に対する非協力ぶりに加えて空海の顕劣密勝の思想が日本仏教界に導入されたことにより、「国師」最澄の評価は下向線をたどることになり、さらに最澄の死は円密一致の思想の体系化のことは弟子達に残こされた大きな課題となった。そしてこの最澄の遮那業は慈覚大師円仁、智証大師円珍らの入唐求法を呼びおこし、その円密一致思想の体系

化の努力は「台密」として結実をみたのである。つまり遮那業の成立のことは、最澄の生みの悩みに苦しんだ先駆的意味を持つものとして、また思想としては体系化の成功でできなかったという点から、最澄は中国天台と日本天台の結合点においてのみ評価されたといえよう。すなわち最澄は中国天台の法華至上主義の「伝灯」を相承して天台法華宗を樹立したという点において高く評価されたが、日本天台として「己証」としての遮那業は円密一致の体系化を成功させなかったという点もあって、不十分な評価がなされていたといえる。このことは鎌倉時代になってからの凝然の天台宗理解になってくると多少の誤った解釈がなされてきている。そこでは中国尊重の姿勢でもって道邃——最澄の系譜と出しているが、もし保守的な伝灯的な中国天台の受法ということになると、行滿——最澄の系譜をあげた方がよいようである。凝然の時代には国清寺天台とか玉泉寺天台の系譜とかが天台山でみられたということは理解されていなかったことはやむをえないとしても、天台密教を無視したのは空海の東密を強く意識したからであると思われる。凝然は各宗の相異点を明白にするため、第六章天台宗、第八章真言宗とだして、順眺よりの密教受法のことは一言もふれていないのである。

しかし最澄の密教思想は、空海の顕劣密勝の思想に対して大刀うちできないほど劣ったものであるとは考えられない。

現に最澄の弟子たちの血みどろの努力の成果として立派に「台密」が成立していることから理解できる。しかし思想的未完成であった点が遮那業軽視となったことは否定できない。当時の日本の現実の苦悩に対応して、普遍的な真実の天台仏教に加えて、現世利己的な修法を加味した天台業、とくに遮那業に対しては正当な評価が与えられていなかったといえる。さらにいうと空海の新伝密教を強く意識して、後代になって遮那業の教学的不備を補うものとして最澄教学の特異性を発揮したものとしていわゆる四宗相承がいわれてきたのであろうか。（四宗相承のことは改めて考えられるべき大きな問題を持っている。）

ともあれ最澄の「己証」は、中国天台の「伝灯」を継承しながら教学論争の枠をこえた実践的課題に答えようとして悪戦苦闘したものであった。そのため最澄教学はあまりにも雄大になり、あまりに実践的であったので、その全体像を把握することは困難であったという欠点がみられる。

第二章 天台法華宗の樹立

第一節 桓武天皇の仏教観

天台法華宗の樹立は、桓武天皇が平安新宗を念願し、そのことを最澄に要請した結果成立したものである。つまり天台法華宗探求の背景としては桓武天皇の仏教観を抜きにしては

考えられない。そこで桓武天皇の仏教観の特色を二方面より考えてみたい。

第一の立場は王法指導型で、権力者として律令仏教の立て直しを計画したり、仏教の事業を盛んにしている。そのためきびしい統制を加え、新時代にふさわしい仏教実現に努力した。天皇の仏教観の特色について村尾次郎博士は、

第一 仏教から淫祠性をとりのぞくこと。

第二 寺院経済の際限もない膨張をおさえて寺院の俗権化を防ぐこと。

第三 学闘争いに終止符をうつこと。⁽¹⁾

と要約している。桓武天皇の時代は四期に分けることができ、その前三期の時代が第一の立場にあたるといえる。

第一期 延暦十年代（平安遷都）まで。

弘仁朝の政策の受けつぎの時期。律令仏教の立て直しを計画して、南都仏教を批判し、やたらに多くの禁止条項を出している。

第二期 延暦二十年代まで。

南都仏教に対する規正の効果がみえてきた時機。そこでは南都教団の欠点が明白となってきたのをうけて、各宗の教学の充実に力を入れている。

第三期 延暦二十三年。（最澄入唐求法に出発する時機）まで。桓武帝の仏教政策の成果のあがった時機。法相宗の独走

体制を強く批判し、一方徳行の勝れた清浄僧を優遇し、律令仏教の立て直しを計っている。

ここにきて今までの仏教肅正の方向を一変させて育成の方針にきりかえて、南都各宗の競学を奨励したり、清浄僧を表彰したりして、かつて法相宗の道鏡によって行こなわれた政教一致の弊害を避けて、世俗の政治の力でもって仏教改革を実行しようとした時機であって、儒教の合理精神でもって政治のイデオロギーとして仏教教団をコントロールしようとしている。このことはある程度まで成功をおさめたが、一面王法の力で仏法の教学まで指導しようとした点に勇み足がでてきている。

第二の立場は天皇が悩乱して怨霊におびえて仏教に懇願したことである。この第二の立場は淫祠性をとり除いて、政教関係を正常の形にもどしたりして、仏法が世俗の政治に介入することを積極的に批判した姿勢がくずれてしまった。そしてそのことは仏教寺院の経済的抑制、教学の奨励、戒律の厳守という肅正と育成の強行路線が逆転して、天皇の病氣平癒のためなら、どんな修法でも受け入れたい、どんなに金がかかってよいという弱者の考え方に変質したことである。ここでは権力者としての強者の立場から南都仏教を批判したり、外護者の立場から指導したりしようとする高圧的な仏教政策はどこかに行つてしまい、現世利益を熱望するという非

合理的な精神が表面にでてきている。つまり弱者の人間として仏教に加護を求め、現世利益を期待する方向に変質しているのが第二の立場である。

歴史の表面では天皇の權威を強調して南都仏教の肅正・育成を計るということに力を注がれているが、反面怨霊思想に悩乱している。そしてそれは延暦二十四年、二十五年の第四期の聖体不予の時機だけではなかった。怨霊に悩むマイナスの部分は歴史の裏面史として扱われ表面にはでてこなかった。そのことは最澄の入唐求法にも影響して三論・法相の二宗を「論宗」と判定し、法華最第一を標榜した「經宗」としての天台法華宗の樹立のことが華やかに喧伝されているが、桓武天皇の精神的安定を計るため新しい修法を求めたことは強調されていなかったことから理解できる。

しかし怨霊思想に悩んだ事実は早くからみられたのである。すなわち桓武天皇が奈良期末期の政争の陰謀の過中に巻きこまれ、自分が立太子になるため井上・他戸母子を死に迫りやった事実が天皇の精神を不安にさせていた。

さらに延暦二十四年の天皇病氣平癒のためには異常な行動が次々ととられている。すなわち延暦四年藤原種継暗殺事件に連座して、淡路へ流される途中で死亡した皇弟の早良親王の亡霊にはおびえつづけ、天皇不予ということになると、早良親王に崇道天皇を追号してその怨霊をなくさめることに狂

奔している。つまり人間の悪業の深さにおののき、崇りを恐怖する弱者としての人間に強者としての王者が変質してしまふ矛盾的な仏教観を持つようになったといえる。つまり南都教団立て直しの政策と自己の弱さに悩み現世利益によりかろうとした二面がみられる。この矛盾の交錯の中で天皇の仏教観はゆらいでいたといえる。そしてこの二つの問題を持った「御願」に応答しようとして、天台法華宗より遮那業の形成へと最澄はひたむきに努力するのである。

（未完）

- 1 『天台教学史』（島地大等）一八頁
- 2 『八宗綱要』（凝然大徳・鎌田茂雄訳註三一〇頁
- 3 『伝教大師全集』第五附録 一二頁
- 4 『天台教学』（佐々木憲徳）四九頁
- 5 『前田慧雲全集』第一 三六八頁
- 6 『伝教大師全集』第一 七頁
- 7 『天台教学』二五一頁
- 8 『弘法大師空海全集』第二卷 思想篇二 五六二頁
- 9 『大正蔵』七四卷二六三の a
- 10 『山家学生式序説』（仲尾俊博）
- 11 第五章入唐求法 第二節 四宗相承（九八頁）以下 参照
『桓武天皇』（村尾次郎）一二三頁

△キーワード▽ 天台法華宗、桓武天皇、道邊、遮那業

（種智院大学教授）